

質的心理学研究

第17号

【特集】

レジリエンス

Japanese Journal of Qualitative Psychology
2018/No.17



日本質的心理学会

Japanese Association of Qualitative Psychology

【発売】

新曜社

『質的心理学研究』 第17号 巻頭言

スタンダードを超えて

2017年9月に首都大学東京で開催された日本質的心理学会第14回大会で、「質的研究評価基準への展望——『Sage質的研究キット』とAPAにおける議論を手がかりに——」というシンポジウムが行われた。“APAにおける議論”というの、アメリカ心理学会（APA）がついに2014年から質的研究の専門学術誌「質的心理学」（*Qualitative Psychology*）の刊行を始めたが、それに伴って質的研究の評価基準を整備しようという動向を指しており、その後「アメリカン・サイコジスト」（*American Psychologist*）の2018年1月号に20ページ超におよぶ詳細な評価基準が掲載された（ちなみに同誌の同じ号には、心理学における量的研究の評価基準も掲載されている）。

このようなスタンダードが登場したことは、質的研究の裾野が拡大を続けていることの表れであり、意義深いことである。これまで以上に質的研究を体系的に学ぶ（あるいは、教える）手引きにもなるだろう。しかしスタンダードを満たせばただちにより研究になるかといえば、そういうわけでもない。

質的心理学は、まだそのような呼称をもたない黎明期から、既存のスタンダードに抗い、その枠を広げ、創意工夫を凝らして自由に研究をすることに価値を置いていたように思う。そのような姿勢が、数多くの独創的な論文を生み出してきた。もちろんスタンダードは無用だとか、それを無視しろと主張したいわけではない。しかしこれだけ質的心理学の裾野が広がりスタンダードができたからこそ、そのスタンダードの枠を広げ、超えるような挑戦を続ける『質的心理学研究』でありたいと願っている。

独創的で挑戦的な論文の投稿をここからお待ちしております。

編集委員長 永田素彦

目次

巻頭言 永田素彦 スタンドを超えて

特集：レジリエンス

(責任編集委員：松嶋秀明・伊藤哲司)

- 安藤成菜・松本光太郎 7
「ろう者の行動・生活実践」に「立ち会う聴者」の観点から探るろう文化と聴文化
- 花嶋裕久 25
ひきこもりの息子をもつ親の体験プロセス
—— ひきこもりへ移行してから危機的状況を脱するまで
- 平野真理・綾城初穂・能登眸・今泉加奈江 43
投影法から見るレジリエンスの多様性
—— 回復への志向性という観点

一般論文

- 渡辺恒夫 66
他者になる夢の現象学的解明
—— フッサール志向性論に基づく主題分析
- 上原美穂 87
外国籍生徒の学校適応と進路選択
—— 日系人青年の語りから

■ 中川善典・桑名あすか	105
民芸・民具の作り手のライフ・ストーリー研究	
—— 高知県芸西村の竹の子笠を事例として	
■ 香川七海	125
教室において生活のリアリティを問うということ	
—— テレビドラマ『鈴木先生』の映像分析を事例として	
■ 大瀧玲子	143
成人期にある知的障害を伴わない発達障害者のきょうだいの体験に関する一考察	
—— ある姉妹の「羅生門」的な語りの分析からきょうだいの多様性を捉える試み	
■ 水谷亜由美	164
幼児はいかに友達と食べ物に分かち合うか	
—— 「森のようちえん」のお弁当場面にみる食の自律性	
■ 浅井亜紀子	185
職業アイデンティティ・ショックと対処方略	
—— 来日インドネシア人看護師候補者の自己をめぐる意味の再編過程	
■ 横山草介	205
「意味の行為」とは何であったか？	
—— J. S. ブルーナーと精神の混乱と修復のダイナミズム	

BOOK REVIEW

■ 《書評特集》レジリエンス	
「レジリエンス」ってなんでしょう？（松嶋秀明）	226
「心」の問題にとどまらないレジリエンス概念の広がりを（評：伊藤哲司）	229
枝廣淳子（著）『レジリエンスとは何か —— 何があっても折れないところ、暮らし、地域、社会をつくる』	
非行からの立ち直りにレジリエンスはどう作用するのか（評：河野荘子）	230
S. T. ハウザー・J. P. アレン・E. ゴールデン（著）、仁平説子・仁平義明（訳）	
『ナラティブから読み解くレジリエンス —— 危機的状況から回復した「67分の9」の少年少女の物語』	
悲嘆を科学する（評：川野健治）	231
G. A. ボナーノ（著）、高橋祥友（監訳）『レジリエンス —— 喪失と悲嘆についての新たな視点』	

ある若手医師のリジリエンス (評: 小森康永)	232
F. モラン (著), 改田明子 (訳) 『がんサバイバー —— ある若手医師のがん闘病記』	
万華鏡の光と陰 (評: 矢守克也)	234
清水美香 (著)・山口和也 (写真・絵) 『協働知創造のレジリエンス —— 隙間をデザイン』	
しなやかな復活力 (評: やまだようこ)	235
A. ゴッリ・A. M. ヒーラー (著), 須川綾子 (訳)	
『レジリエンス 復活力 —— あらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何』	
編集委員会からのお知らせ	237
『質的心理学研究』 規約	241
投稿に際してのチェックリスト	244
『質的心理学研究』 特集と投稿のお知らせ	245
英文目次	248
『質的心理学研究』 バックナンバー	249

表紙デザイン 白井新太郎

特 集

レジリエンス

近年、レジリエンス（resilience）という言葉を目にする機会が多くなった。国際的にもデータベースに登録される“resilience”をキーワードとして検索可能な研究は指数関数的に増大している。復元力、回復力、しなやかさ、打たれ強さなどと訳されることが多い。精神医学、心理学、ソーシャルワークといった領域では「逆境やリスクの存在にもかかわらず、良好な適応を遂げる」とされる。

現在、レジリエンスが注目される領域は多岐にわたる。精神障害のリスクを抱える人々の予防にはじまり、虐待や、貧困、戦争や自然災害を経験して育った子どもが、不適応に陥ることなく育つことを保証する観点から、あるいは、末期ガンの人々や家族への支援に関わってレジリエンス研究の必要性が広く認識されるようになってきている。個人のみならず、自然災害によって、人間関係のつながりを失ったコミュニティをどのように再生していくのかといった議論もあれば、工学的な立場から、災害にあってもいち早くたちなおる街づくりを目指すという意味で「レジリエント社会」「レジリエントな街づくり」といった用語がきかれるようにもなった。筆者のひとりである伊藤は、所属大学におけるサステナビリティ学の研究・教育拠点を牽引しているが、文理が融合したこの領域では「レジリエンス」がまとまるためのキーワードのひとつとなっているという。

このようにレジリエンス研究は増大しているが、大部分はレジリエンスを一変数とした、数量的な手法によるものである。その具体的な様相を、どう記述するのかという方法論に関する議論はまだ十分ではないように思われる。

例えば、レジリエンスを、どのような概念としてとらえるか。逆境やリスクをはねかえす個人的特質としてとらえる言説もあるが、その一方で、レジリエンスとは個人の特質であるというよりは、逆境にあるなかで、周囲の環境との相互作用の結果としてうみだされるものとしてみることもある。

また、レジリエンスとは、単に逆境やリスクにみまわれる以前の姿にもどることでもないといわれる。例えば、自然災害に見舞われたコミュニティがレジリエンスを発揮するという場合、それは当初の状態にもどることではなく、災害の教訓をいかして新たなコミュニティへと生まれ変わっていく過程であるかもしれないといったように、である。例えば、西條剛央は『チームの力——構造構成主義による“新”組織論』（ちくま新書、2015）のなかで、2011年に東日本をおそった震災・津波にかかわって「この悲惨な出来事を肯定することは決してできないけど、あのことがあったからこんなふうになれたと思うことはできる。それが僕たちが目指すべき未来なのだ。」(p.58)と述べている。虐待にさらされて育った子どものようなケースでも、同じことがいえる。そもそも、子どもの発達はそれぞれに個性的であって、もどるべき以前の状態が想定できないようにも思われる。

また、研究者のスタンスも、自然に生じたレジリエンスの観察に専念する立場から、積極的にレジリ

エンスを育てようとする援助の提供者の役割もまた担うようになってきた。例えば、マイケル・ウンガーの『レジリエンスを育てよう——危機にある若者たちとの対話を進める6つの戦略』（松嶋秀明・奥野光・小森康永 訳、金剛出版、2015）では、社会的に逸脱してしまいそうになる若者との対話のなかで、大人がよかれと思って口に出してしまう（若者にとっては迷惑な）忠告や、いくらなんでも目にあまると口をついて出る（若者を幻滅させる）説教に警鐘がならされている。そして、子どもの声をありのままに聴くところからはじめ、危機にある若者が社会的に受け入れられる行動がとれるよう援助するためのノウハウが書かれている。このような援助実践のなかであらわれてくるレジリエンスを記述するためには、援助者がどのような意図や狙いをもって介入したのか、あるいは、複数の援助者がどのように協働したのかといったことや、援助者自身の認識の変化の過程が注目されるだろう。その一方、そうした周囲の環境が、レジリエンスを発揮する人々にどのように意味付けられるのか、その意味の生成過程に着目することも重要だろう。

このように時間の流れのなかで、多様なエージェントが関わっておこる複雑な相互作用過程を記述するうえで、質的研究が役立つのは間違いない。とはいえ、それはけっこう難しいことかもしれない。そこにはどのような工夫が必要になるだろうか。筆者のひとりである松嶋はこれまでレジリエンスを援助過程のなかで相互作用のなかであられるものとして、エスノグラフィーなど質的に記述することが多かったが、レジリエンスを個人的特質ととらえて質問紙調査をしている人のなかには、そうしたとらえ方を乗り越えたいと考えている人もいるだろう。多様なレジリエンスのとらえ方同士、いますぐには相容れなくても、影響をあたえあってレジリエンスの研究が盛んになるような対話がうみだせるかもしれない。

今回の特集は、多様な領域において、レジリエンスの生成過程を豊かに記述した経験的研究や、方法論をめぐっての論考を期待して企画をたてた。その結果、オーソドックスなスタイルのみならず、多くの萌芽的で、挑戦的な論考がよせられたと思う。この特集を通して、レジリエンス研究をよりよく発展させるような建設的な対話がうまれることを期待したい。

特集 責任編集委員 松嶋秀明・伊藤哲司

「ろう者の行動・生活実践」に「立ち会う聴者」の観点から探る ろう文化と聴文化

安藤成菜 神栖市役所

ANDO Ayana Kamisu City Hall

松本光太郎 茨城大学人文学部

MATSUMOTO Kotaro College of Humanities, Ibaraki University

要約

ろう者たちに共有される行動様式・生活様式の体系であるろう文化を明らかにする手段として、聴者である筆者がろう者の日常場面に同行した。筆者がろう者の行動・生活実践に立ち会うなかで直接観察した記録には、ろう者の行動・生活実践に対する気がかりや、聴者の当たり前が破られ、驚きを伴う聴者の行動・生活実践への逆照射が含まれていた。本研究の目的は、ろう者の行動・生活実践に聴者が立ち会うなかで記録した事例の検討を通して、ろう者の行動様式・生活様式であるろう文化および聴者の行動様式・生活様式である聴文化を明らかにすることであった。事例検討を経て、ろう文化と聴文化として2点が明らかになった。1点目に、ろう者と聴者では、同じ環境に取り囲まれるなかで、知覚する対象や対象から読み取る意味が異なっていることを明らかにした。2点目は、ろう者が聴者を相手にした相互行為と聴者がろう者を相手にした相互行為が異なることを明らかにした。

キーワード

ろう文化, 聴文化, 行動・生活実践, 行動様式・生活様式, 立ち会う

Title

“Deaf Culture” and “Hearing Culture” from the Perspective of a Hearing Person Accompanying Deaf People in Their Behaviors and Activities

Abstract

“Deaf culture,” defined as behaviors and lifestyles of Deaf people was investigated. The author, who is a person with normal hearing (a hearing person) accompanied Deaf people and observed their daily life while taking notes. Conditions of “Deaf culture” and “hearing culture” were compared and investigated by examining the recorded notes of cases, which resulted in two main findings. The first result indicated Deaf people and hearing people perceived different objects and gave different meanings to objects in spite of being surrounded by the same environment. Secondly, interactions between Deaf and hearing people differed in their relationship to each other.

Key words

deaf culture, hearing culture, behaviors and life activities, behavioral and life styles, accompany

1 背景と目的

本研究では、ろう者の日常場面に同行し、聴者がろう者の具体的な行動・生活実践に立ち会うことを通して、ろう者の行動様式・生活様式であるろう文化を明らかにする。また、聴者の行動様式・生活様式である聴文化も併せて明らかにしていく。

1.1 ろう者と手話, そしてろう文化

「ろう者」という呼び名は、耳が聞こえない「聴覚障害者」とは異なる意味が込められている。アメリカでは、耳が聞こえない人をdeafと表し、ろう者をDeafと表す (Padden & Humphries, 2003/1988)。アメリカ人をAmericanと表すように、固有名詞は頭文字を大文字にする。Deafと表すことは、英語とは異なる固有の言語であるアメリカ手話を用い、独自の文化を持つコミュニティとしての位置づけを意味している。この位置づけを日本に応用したのが、冒頭『『ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である』——これが、私たちの『ろう者』の定義である』(p.8) という文言で始まる「ろう文化宣言」(木村・市田, 1996) であった。日本手話は日本語と異なる文法体系に基づいていて、日本語に対応していない。日本手話と日本語の言語の違いは、関西手話カレッジ (2009) に詳しい。

人類学者である亀井 (2009) によれば、事例から理論や概念を作り上げる帰納法に則って、耳の聞こえない人たちが用いている手や顔の表情で表現される視覚的な言語が「手話」であり、その言語を用いる人たちが「ろう者」である。一方で、耳の聞こえる人たちが声で話す言葉が「音声言語」で、その言語を用いる人たちが「聴者」である。

そして、ろう者特有の文化であるろう文化とは、ろう者たちによって習得され、共有され、伝達される行動様式ないし生活様式の体系である (亀井, 2010)。耳の聞こえない人たちが手話を用いるろう文化は、ろう者の行動様式・生活様式を通して明らかにできると考えられる。

1.2 ろう文化を探る手段¹⁾

ろう者特有の行動様式・生活様式の体系であるろう文化を明らかにするために、いくつかの手段が挙げられる。

(1) ろう者が自ら語る

ろう者が自ら行動様式・生活様式を語ることが、ろう文化を明らかにする手段として考えられるだろう。

ろう者である木村 (2007) は、自分の普段の生活のありのままを具体的にかつ体系的に記す「ろうの民族誌 (エスノグラフィー)」を目論んでいた。しかし、ろう者本人が「ろうの民族誌」を書くことは困難を伴う作業である。なぜなら、ろう者にとって当たり前のことが、聴者にとって当たり前でないことが往々にしてあり、ろう者にとって当たり前であることの何が聴者にとって当たり前でないのかが分からないからである (木村, 1996)。また、あらためて「ろう文化とは何か」を聴者に説明しようとして、自分の生活のなかのどれがそれに当たるのか考えあぐねてしまった経験を語るろう者たちがいる (亀井, 2010)。

哲学者であるライル (Ryle, 1987/1949) は、行為を自らある程度行うことができる能力を「方法を知ること (knowing how)」として、行為を説明する方法論を知っている「内容を知ること (knowing that)」と区分している。そして、前者が後者を伴うものでは必ずしもないことを指摘した。ろう者は、ろう者特有の行動様式・生活様式を実践している点で、ろう文化の方法を知っている。しかし、方法論は行為の実践を批判的に探究した結果得られるものである (Ryle, 1987/1949)。そのため、ろう者がろう文化の方法を知っていることと、ろう者がろう文化の方法論を知っていることは一旦分けるべきだろう。

自分を対象にして見ることの構図を図1に表した。ろう者に限らず、自分の行動・生活実践を対象にして見ることは、すなわち自分の行動・生活実践を自覚することには限界がある。よって自分自身の行動様式・生活様式を知ること、すなわち自ら知ることができる方法論は一部に限られるのではないだろうか。



図1 自分の行動・生活実践を対象にして見ることの構図

(2) 聴者の質問にろう者が答える

ろう者を対象にした質問紙調査やインタビュー調査が行われてきた。山口(1997)は、ろう学生を対象に聴者のコミュニティとの葛藤に関する質問紙調査を行い、①聴者に耳が聞こえないことを伝えることやそれに伴う配慮を求めることができないこと、②聴者とのおしゃべりで一緒に笑えないことなど疎外感を感じていること、③聴者とは互いに理解できない乖離を感じていることを明らかにしている。カースティング(Kersting, 1997)は、ろう学生を対象に社会的相互作用に関する半構造化インタビューを行った。聴学生との相互作用では、「物理的バリア」と「先入観」を経験していた。教室にて講師や手話通訳を見るために、ろう学生は最前列に集まって座る。そのため、聴学生と物理的に離れてしまい、両者がやりとりすることが難しくなっていることを物理的バリアとして挙げている。先入観は、ろう学生はそれぞれ違う個性を持っているのに、聴学生がろう学生をあくまでもろう者の1人と見なしていることを挙げている。そして、広津(2011)は、ろう者がやりとりの相手(ろう者、手話を使う聴者、手話を使わない聴者)をどう受け止めているのかについて、手話による半構造化インタビューを行っている。①聴者は言語に限らず土台が違い、ズレが存在していること、②手話を用いない聴者のコミュニティのなかでのやりとりが悩ましい課題であること、③聴者が歩み寄ろうとすることを好意的に受け止めていて、つながりたいと願っていることなど、ろう者がやりとりの相手をどう受け止めているのか明らかにしている。

聴者からの疑問・質問にろう者が答える質問紙やインタビューであれば、先述した「ろう者にとっての当たり前」(木村, 1996)を照らし出し、ろう文化を明らかにできそうである。しかし、質問紙調査やインタビューを通して明らかにできるろう文化も、以下の理由でろう文化の一部に限られることが考えられる。

聴者の疑問・質問にろう者が答える質問紙やインタ

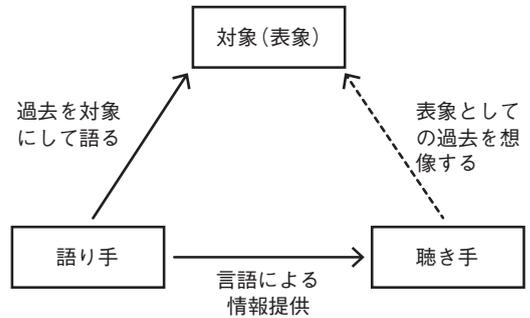


図2 質問紙調査やインタビュー調査の構図

ビューの構図を図2に表した。語り手であるろう者は、行動・生活実践を経て形成された過去に関する言語情報を聴き手である聴者に提供している。一方の聴き手である聴者は、語り手の言語情報に基づいて、表象としての過去を想像する。

知覚と想起に関する松島の議論によれば、過去は言語的であり、かつ、知覚とは別次元にある(松島, 2002)。具体的に体験した知覚から持続と変化を経て言語により語られることが過去である。森(2010)がナラティブ研究の課題として挙げている「時間のズレ(現在と過去の私のギャップ)」と「具体-超越のズレ(動的な体験者の身体と静的な言語記述のギャップ)」は、図2に表したように、ろう者を対象にした聴者による質問紙調査やインタビュー調査においても課題となるだろう。

聴者からの疑問・質問にろう者が答える質問紙調査やインタビュー調査は、「ろう者にとっての当たり前」(木村, 1996)を照らし出すため、ろう文化を知るうえで妥当な手段ではあるものの、上述の「時間のズレ」と「具体-超越のズレ」からろう文化の一部を知ることに限られることが考えられる。

(3) ろう者の行動・生活実践を直接観察する

本研究で採用するろう者の行動様式・生活様式を明らかにする手段は、質問紙やインタビューといった言語報告を経ずに、ろう者の行動・生活実践を直接観察することである。

スティンソンとリユー(Stinson & Liu, 1999)は、第1研究として、ろう生徒もしくは難聴生徒が一般クラスに参加してコミュニケーションする際のバリアやサ

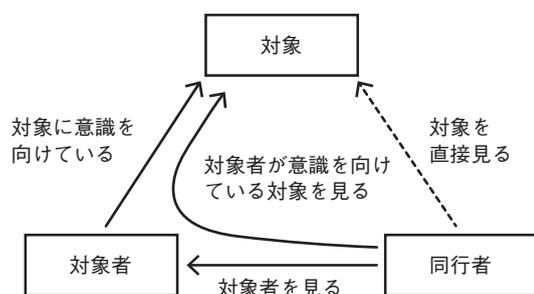


図3 直接観察することの構図

ポートについて、スタッフ（ろう教師、通訳、ノートテイカー）からフォーカスグループインタビューを通して言語報告を収集した。その後第2研究として、4名のろう生徒が一般クラスに参加している場面にてスタッフ（ろう教師、聴教師、通訳）や聴生徒、そしてろう生徒がコミュニケーションにどう貢献するのかについて観察を行い、言語報告と観察の対応関係を確認している。

言語報告から観察へと研究の方法を変えていくことについて、山田（2009）は、論文「インタビューとフィールドワーク」において、インタビュー時に対象者の語りの収まるべき社会・文化的文脈が自分で捉えられず、もどかしく・悔しく感じたことから、その後対象者の生活世界を知るためにフィールドワークに着手した経験を振り返っている。

本研究で注目するろう文化、すなわち、ろう者の行動様式・生活様式を知ることを求めるとき、行動・生活実践を直接観察する手段も妥当ではないだろうか。対象者であるろう者の行動・生活実践を、同行者である聴者が直接観察することの構図を図3に表した。同行者は、対象者が意識を向けている対象を見ること、対象に意識を向けている対象者を見ること、そして対象を直接見ることができる。この方法であれば、目下具体的に研究対象を見ているので、「時間のズレ」と「具体-超越のズレ」（森, 2010）は生じない。

(4) ろう者の行動・生活実践に立ち会う観察者

ろう文化は、ろう者たちによって習得され、共有され、伝達される行動様式ないし生活様式の体系と定義されていた（亀井, 2010）。このように定義した利点

として、観察可能な現象のリストにより、ろう者の文化を聴者の文化と比較できるものとし、ろう者の行動様式・生活様式を人間行動のヴァリエーションの一部として位置づけることができる。

ろう文化を多様な文化のなかの1つとして位置づけたとき、ろう文化は聴文化との違いを通して、また聴文化はろう文化との違いを通して、それぞれの文化の特徴を明らかにすることができる。そのようにろう文化と聴文化を位置づけると、その両文化を比較する観察者の位置づけについて考慮しなければならない。なぜなら、両文化を公平に比較するためには、ろう者でもあり聴者でもある中立の観察者が必要であるが、誰しもろう者と聴者のいずれかに偏っているからである。観察者がろう者もしくは聴者に偏っていることを前提に、両文化の比較を構想しなければならない。

作道（2010）によれば、フィールドワークは自己の変容を通じて他者理解をめざしているのだが、このときの「自己の変容」とは他者の痕跡を自己に見ることである。フィールドノートには何をどのように書くのかという点で自己の変容が含まれていて、フィールドノートは研究者と相手のセンスのズレによる「気がかり」を記したものとされている。筆者が観察して記録したろう者の行動・生活実践は、聴者としての自己の変容が含まれていて、ろう者とのセンスのズレである気がかりであったといえる。また、南（1996）は、文化を共有する人々が日常の当たり前の世界を編成し解釈する仕方を、社会学者ガーフィンケルの用語から「エスノメソッド（文化の方法）」と呼んでいる。そしてエスノメソッドは、それが破られたときに、驚きや戸惑い、怒り、嫌悪など強い感情を伴って逆照射されるとしている。ろう文化と聴文化はそれぞれ多様なエスノメソッドの1つで、ろう者としての行動様式・生活様式は、聴者の行動や生活実践との比較によって破られたときに逆照射される。一方で、聴者としての行動様式・生活様式は、ろう者の行動や生活実践との比較によって破られたときに逆照射されるといえるだろう。

他者理解には自己と他者とのセンスのズレによる気がかりが含まれているという作道（2010）の見解と、自分たちの当たり前が（他者によって）破られたときに自己理解が可能になるという南（1996）の見解

は、他者を対象に研究することが、自己を介した他者理解と他者を介した自己理解を並行して引き出すことを示唆している。ろう者を対象に聴者が研究することは、聴者を介したろう者理解およびろう者を介した聴者理解を並行して引き出すことになる。

ろう者単体ではなく、ろう者と聴者に注目する探究はすでに散見される。ろう者と聴者の夫婦が日常生活を営むなかでそれぞれの立場から行動や生活実践を観察して、ろう者と聴者それぞれの当たり前の世界を照らし合うことを通して、ろう文化と聴文化を提示しようとするユニークな試みがある（秋山・亀井，2004）。また、ろう者だけを研究対象者とするのではなく、ろう者、聴者、そして難聴者を含む手話会話がろう者のリアリティを反映したものであるとして、手話会話の分析からろう者特有のコミュニケーションの方法に迫ろうとする研究がある（坊農，2010）。

これまで、ろう者の行動様式・生活様式であるろう文化を明らかにする妥当な手段を検討してきた。先行研究によって明らかにされてきた行動様式・生活様式はあるものの、直接観察することにより明らかになるろう者の行動様式・生活様式は残されていると考えた。

本研究では、ろう者の日常に聴者が同行し、ろう者と一緒に移動することで、聴者がろう者の具体的な行動・生活実践に立ち会うことを研究の手段として採用する。そして、ろう者の行動・生活実践に聴者が立ち会うなかで記録した事例を検討することで、ろう者の行動様式・生活様式であるろう文化および聴者の行動様式・生活様式である聴文化を明らかにすることが本研究の目的である。

2 研究概要

2.1 実施内容

ろう者に同行して、ろう者の行動・生活実践や第一著者（以下、筆者）とのやりとりを記録した。食事や買い物に同行することが多かった。記録は主に同行終了後に行った。同行中に記録をとる際には、対象者が席を外している間に手帳に書き込むようにした。また、

研究を行うことについて、記録開始からしばらく経過した後、対象者に報告して了承を得た。

2.2 対象者

筆者が所属している手話サークルのメンバーである2人のろう者（Uさん、Oさん）に同行した。このサークルは、研究の実施当時、ろう者6名、難聴者2名、聴者10名が所属していた。同行した2人の概要は、以下の通りである。

(1) Uさん

40代の男性。先天的に耳が聞こえず、両親もろう者であった。2人の姉は聴者である。現在は会社員として働いている。

がっしりとした体格をしている。スポーツが好きで、ジムに通い、ゴルフの大会にもよく参加している。教えることが好きで、ろうの子どもたちにゴルフを教えることや、茨城県内の大学の手話サークルで手話を教えることを時々していた。日本語の文章の読み書きができる。

(2) Oさん

60代の男性。先天的に耳が聞こえなかった。また、若い頃から足が不自由で、常時車椅子を使用している。車椅子を使用しているためか、周囲の人から声をかけられることがよくある。現在は裁縫関係の仕事をしている。

外見は、いつもにこにこしていて、優しそうな雰囲気である。茨城県内の大学の手話サークルで学生に手話を教えることがあり、学生と交流する機会は多い。日本語の文章の読み書きは苦手である。²⁾

2.3 実施日と概要

2012年11月29日～2013年11月23日の間、Uさんは10回、Oさんは3回、食事や買い物に誘われた際に同行した。同行の実施日と概要は表1の通りである。

表1 同行の実施日と概要

Uさん1回目	2012年11月29日(木) 18:30～ 事例9 Uさん, 友人(筆者と同じ手話サークルに通っている聴者), 筆者の3人でラーメン屋で夕食をとった後, レストランへ移動し雑談をした。
Uさん2回目	2012年12月23日(日) 18:30～ 事例3 Uさんとラーメン屋で夕食をとった後, Uさんの欲しい本の取り寄せをしに書店へ行った。その後, レストランへ移動して雑談をした。
Oさん1回目	2012年12月24日(月) 10:00～ 事例10, 13, 14 Oさんと電車でショッピングセンターへ行き, 買い物や食事をした。その後, 市街地に戻り, 駅構内で買い物をして, レストランで夕食をとった。
Uさん3回目	2013年1月18日(金) 19:30～ Uさんとラーメン屋で夕食をとった。帰りにコンビニエンスストアに寄り, 雑談をした。
Uさん4回目	2013年2月9日(土) 19:00～ Uさんと, Uさんが通っているジムに行き, 夕食をとり, 卓球をした。
Uさん5回目	2013年2月16日(土) 18:30～ 事例1, 8 Uさん, Uさんの友人3人(3人ともろう者), 筆者の5人でラーメン屋で夕食をとった。
Uさん6回目	2013年3月30日(土) 14:00～ 事例12 Uさんとゴルフ練習場へ行き, ゴルフを覚えてもらった。その後レストランへ移動し, 夕食をとった。
Uさん7回目	2013年5月3日(金) 19:00～ Uさんと飲食店で夕食をとった。
Uさん8回目	2013年6月16日(日) 19:00～ 事例5 Uさんとショッピングセンターへ行き, レストランで夕食をとり, 食料品売り場で買い物をした。
Uさん9回目	2013年7月11日(木) 18:30～ 事例4, 6, 11 Uさんがギフトカードを購入するのに付いて行った。その後, 飲食店で夕食をとった。
Uさん10回目 Oさん2回目	2013年11月9日(土) 13:00～ 事例2 Uさん, Oさん, ろうの男性, 難聴の女性, 筆者含む聴者4人の8人で筆者の通う大学の文化祭をまわった。筆者が所属している手話サークルに全員所属している。
Oさん3回目	2013年11月23日(土) 10:00～ 事例7, 15 Oさんと電車でショッピングセンターへ行き, 買い物をして, 昼食をとった。

2.4 筆者(同行者)

筆者は聴者で, 当時茨城県内の大学に通っていた。小学校の総合の授業で少し学んだ手話に興味があり, 大学2年が終わった春休みに手話サークルに通おうと思立った。大学3年生の5月から手話サークルに参加し, 筆者はろう者と初めて関わった。初めはろう者について話しかけてしまい, 気づいてもらえないことがよくあった。そのたびに, 彼らには自分とは違った世界が見えていると感じた。そして, 彼らが聞こえないのと同様に, 筆者自身も聞こえない世界を見ることができないと気づかされた。サークルに通う

ちに手話で少しずつ話せるようになり, ろう者と色々な話ができるようになった。彼らと親しくなり, サークル活動の場から離れて一緒に出かけるようになると, ますます聞こえる自分と彼らの違いが見え, 聞こえない人が筆者と同じものを見たときに何を経験しているのか知りたいという気持ちが強くなった。これが本研究を始めた経緯である。

Uさんと筆者の会話は日本手話を中心に行われた。Uさんは, 聴者と話す際に相手が分からないであろう単語については日本語の口の動きをつけて話してくれた。筆者もUさんの口の動きを参考にした。また, Uさんは自分の話したことを筆者が理解していないときには, 指文字で補ってくれることや日本語対应手話に

言い換えてくれることがあった。

Oさんと筆者の会話は日本手話を中心に行われた。Oさんはジェスチャーをしばしば用いていた。Oさんは、日本語の読み書きが不得手であるために、筆者との会話で、日本語対応手話を用いることはなく、口話が付くこともなかった。Uさんに比べると、Oさんの話を筆者が理解できなかったことは多かった。

筆者の手話能力は日常会話に支障がない程度であった。記録は、日本手話を中心とした対象者とのやりとりを筆者が日本語に変換した。日本手話は日本語に対応していないので、英語から日本語に翻訳するときと同様に、日本語への変換が難しいことがあった。そのため、日本手話から日本語への変換において、ニュアンスが違っていたことはありうる。

3 事例検討

ろう者に同行するなかで立ち会った行動・生活実践を分類・整理することを通して、ろう者と聴者の行動様式・生活様式を検討していく。事例における「」内は声による会話を、『』内は手話による会話を表す。

以下各事例の始めに、[年月日]を表記する。年月日は、2013年10月4日であれば、2013年は13、10月は10、4日は04で、まとめると[131004]になる。

3.1 ろう者の行動・生活実践に立ち会う

知覚の違い

ろう者と聴者における知覚の違いを行動や生活実践に関する3事例を検討して確認する。

事例1 [130216]

Uさんの車に筆者は同乗させてもらい、Uさんの友人たちとの待ち合わせ場所に向かっていた。車のテレビがついていて、音量がとても大きかった。運転しているUさんに筆者が『音量下げてもいいですか?』と尋ねると、『いいよ。ごめん、音大きかった?』とUさんは応えた。

事例2 [131109]

筆者が通う大学の文化祭をOさんとDさん（難聴者）と回る。バンド演奏をしているステージの前を通りかかったとき、Oさんがステージを指さして、『何やっているの?』と尋ねてきた。筆者が『ギターとか、歌とか、ドラムとか……』と答えると、Oさんが頷く。Dさんが「うるさい」「うるさい」と口話と手話で発話すると、Oさんも顔をしかめながら『すごい音だ』と言う。筆者にとっても大きな音だったので、筆者も頷き顔をしかめた。

事例1では、筆者にとって車載テレビの音が大きく、うるさく感じた一方で、Uさんは音が聞こえていない様子だったことを記録している。Uさんと筆者において、音の知覚に違いがあることが確認できる。

事例2では、Oさんがバンド演奏の大きな音に『すごい音だ』と顔をしかめて反応していた。Oさんの『何やっているの?』という問いかけに対して、筆者が楽器演奏や歌っていることを教えたことやDさんが『うるさい』と発話したことで、Oさんは音が鳴っていることを知り、『すごい音だ』と顔をしかめた可能性はある。他方、バンド演奏の大きな音が身体に響いていたので、Oさんは筆者に『何やっているの?』と尋ねた可能性もあるだろう。多くのろう者にとって低周波数域はもっとも聞きやすい音で、ろう者は床や家具の振動を通して聞こえている（Padden & Humphries, 2003/1988）。Oさんにおいても、大きな音が身体に振動を起こすことで音を知覚していたことは間違いないだろう。

事例3 [121223]

車に乗ってUさんと会話していた。Uさんは『この前電車で東京に行ったけど、電車は慣れない。電車って停まった時に駅名聞こえるの?』と筆者に尋ねた。筆者が『はい』と答えると、Uさんから『（電車で）寝ていても、停車した時にいちいち起きて駅名の表示を探して見なきゃいけない』と返ってきた。

最近の電車には、車内放送に加えて、駅名が表示される画面が備えつけられていることが多い。筆者は

以前電車に乗った際に、表示画面があれば停車駅が分かって、ろう者は困らないだろうと考えていたことがあった。しかし、この事例でUさんは、停車駅を知るためには、駅名表示に視線を向けなければならないことを教えてくれた。

聴くことは方向を選ばないのに対して、見ることは視界に限られてしまう。亀井（2009）において、ろう者に対して照明の点滅で合図することが紹介されている。包囲する光を変化させることで、ろう者に見ることをうながしているのである。

事例3では、ろう者が情報を得るためには、対象に視線を向けることや対象を視界に入れなければならないことが分かる。その一方で、秋山・亀井（2004）によれば、手話という見る言語を用いるろう者同士はガラス越しに会話することが可能である。

先取りするろう者の行動・生活実践

前項ではろう者と聴者の知覚の違いについて事例を通して確認した。本項では、ろう者の行動・生活実践のなかで、聴者の行動・生活実践を先取りしていた3事例を紹介・検討する。

事例4 [130711]

筆者の自宅近くにUさんが車で迎えに来た。Uさんは前日のゴルフ大会の賞品であった豚肉の味噌漬けを筆者にプレゼントしてくれた。Uさんは豚肉の入った箱を筆者に手渡し、『冷凍庫に入れてきな』と言った。筆者は『ありがとうございます』とお礼を伝えて、冷凍庫に入れようと自宅のアパートに向かった。Uさんから50mほど離れたところで、後ろから声が聞こえた。筆者が振り向くと、Uさんが声を出しながら手招きをしていた。Uさんの近くまで戻った筆者に『その箱、要らなかったら持ってきな』とUさんは言った。

Uさんは普段、筆者と手話で会話するので声を出すことはあまりない。このときUさんは筆者を呼ぶために声を出した。筆者はUさんの声に気がついて振り向いた。Uさんは離れた場所にいた筆者を呼び止めるために、声を発したのだろう。Uさんは、筆者が聴者であることを踏まえて、声を出して呼び止めれば筆者が

気づくことを先取りしていたと考えられる。

事例5 [130616]

Uさんと筆者と一緒に夕食を食べに行った。レストランに着いた時、店は混んでいた。入り口に置いてある台に、待っている客を順番に呼ぶための名前を記入する紙があった。Uさんはペンを取り、そこに筆者の名字を書き、『待ってよう』と筆者に言葉をかけて台を離れた。

事例6 [130711]

Uさんからギフトカードを買うのに付いて来てほしいと頼まれたので、一緒に買いに行った。お金を払い終え、最後に購入者の氏名や連絡先を記入する紙を筆者が店員から渡されたので、その紙をUさんに手渡した。Uさんは氏名、住所を記入していき、最後に電話番号を書く欄に番号を書き、その番号の後ろに（FAX）と書き添えた。

事例5では、レストランにて順番待ちをしているとき、Uさんは筆者の名字をさりげなく書いた。事例6では、電話番号を記入する際に、Uさんは末尾に（FAX）と記す手が滞ることなく書いていた。

聴者はレストランの順番待ちで自分の名前を書くことが通常だろうし、電話番号を記す際に（FAX）と書き足すことはないだろう。聴者は、聴者から声で名前を呼ばれても、応答に困ることはない。同様に、聴者は、聴者から声で電話がかかっても、応答に困ることはない。

しかし、ろう者において、聴者から声によって、順番待ちで名前を呼ばれたり、電話がかかっていたりしたとき、応答が困難であることが予想される。そのような将来の聴者からの声による働きかけを先取りするがゆえに、筆者の名字を書くことや（FAX）と記すことになったと考えられる。

聴者が対応できないろう者との相互行為

前項では、聴者を先取りしていたろう者の行動・生活実践を検討した。本項では、聴者が対応できなかったろう者との相互行為について、1事例のみ検討する。

事例7 [131123]

レストランにてOさんと2人で昼食をとっていた。Oさんは先に食べ終わり、『今日は首までファスナーがあるセーターを買いだ』とまだ食べている筆者に話しかけてきた。その後Oさんの話は5分程続いた。筆者は話を聞くため、また相槌を打つため、Oさんの方へ顔を向けていて、食事を進めることがなかなかできなかった。筆者が話を聞くことで食事が進んでいないことにOさんは気づき、『ごめんね。食べて、食べて』と筆者に食事をするようにうながした。

Oさんは筆者よりも先に食事を終え、筆者に話しかけていた。しかし筆者は、Oさんの話を聞き（手話を見て）、相槌を打つために、食事を続けることが難しかった。聴者である筆者にとって、声や音を聞くことは、顔の向き・視線の向きが拘束されないので、食事をしながらできる。一方、筆者にとって、手話を見ることは、顔の向き・視線の向きが拘束されるため、食事と一緒にすることは難しい。西垣（1996）において、聾学校の給食場面で、生徒は話しかけられているときも視線はしっかりと話者を見据えながら食物を口に運ぶことが紹介されていた。

坊農（2010）では、聴者における食事中的手話会話の難しさを研究課題に据え、手話会話の観察・分析から、手話会話と音声会話について検討していた。音声会話では、聞いている姿勢を示す受け手性の表示や会話参与の姿勢を示すことはあるものの、話し手と受け手の姿を注視していなくとも、会話の進行を聴覚でモニターして、会話の中盤で参与することが可能である。一方、手話会話においては、会話に割って入る際、相手の視覚的注意を得られていなかったために、相手の腕に触れようとして視界に入り、相互注視の獲得が明確になった後に、次の発話を始めていた。手話会話では、相互注視の獲得と会話参与の姿勢を同時達成している可能性があるとしてされている。この研究が興味深いのは、音声会話は聴覚、手話会話は視覚という情報伝達の仕方の違いを強調するのではなく、それぞれの言語コミュニティの住人のふるまい方に注目している点である。事例7において、筆者がろう者に対応できなかったのは、手話会話者のふるまいに不慣れだったことが

考えられる。

3.2 ろう者同士の行動・生活実践に立ち会う

ろう者同士の行動・生活実践に立ち会うなかで、ろう者同士が道具（鏡）を介して会話していることを確認した。

ろう者同士の会話

事例8 [130216]

Uさん、Uさんの友人3人（いずれもろう者）、筆者の5人で夕飯を食べに行った。Uさんの車で行くことになり、Uさんが運転席に、筆者が助手席に、Uさんの友人3人が後部座席に座った。筆者が後ろに顔を向けると、後部座席で3人が手話で会話していた。車が動き始め、しばらくして運転席のUさんに目を向けると、Uさんは後部座席の3人の会話をバックミラーで見て、バックミラー越しに後部座席の3人に向けて手話をして、鏡越しに会話をしていた。

運転手であったUさんと後部座席に座っていたろう者である友人たちが、バックミラー越しに手話で会話をしていた。亀井（2009）によれば、ろう者は自動車の運転中に片手でハンドルを握り、片手で手話を話すことがあり、後部座席のろう者の返事はミラーで見ていることがある。

運転手と後部座席に座っている人が聴者であれば、運転手は前を向いたままでの会話が可能である。声はどの方向からも聞こえてくるからである。

鏡を使用した会話は、ろう者が視界の範囲を知覚していることと関わっている。ろう者間の会話について、ハリス、クリベンス、ティビットとチェシン（Harris, Clibbens, Tibbitts, & Chasin, 1987）の報告によれば、ろう母とろう児の間では、母親の手話発話の3分の2が子どもの視界内で表示されていて、子どもによる対象への注意が実現している（Loots, Devisé, & Jacquet, 2005）。また、先述した坊農（2010）によれば、手話会話コミュニティでは、相互注視の獲得が明確になった後に、次の発話を始めていた。

事例7で検討した聴者が手話会話者のふるまいに

不慣れだったことと対照的に、ろう者同士は車のバックミラーを使用して、互いの視界に手話を入れることで会話を成立させている。そして、ろう者はバックミラーという対象から、事例5と6と同様に聴者とは異なる使用方法を見出していることが分かる。

3.3 ろう者と聴者の行動・生活実践に立ち会う

ろう者に同行するなかで、筆者が強い感情を伴い驚きや戸惑いを感じるのは、ろう者が聴者に出会う場面が多かったように思える。以下では、ろう者と聴者の行動・生活実践に立ち会った事例を紹介・検討していく。

聴者に対するろう者の行動・生活実践

事例8では、ろう者同士が鏡を使用して、視界に手話が入るように会話をしていた。また事例7では、ろう者が筆者に手話で話しかけ続けたため、筆者は視線を外すことができず、食事をとることが難しかった事例を紹介した。次に紹介する2事例では、筆者以外の聴者に対しても、ろう者は聴者の視線を引きつけたうえで意思疎通を図っていた。

事例9 [121129]

Uさん、筆者の友人（聴者）、筆者の3人でラーメン屋に夕食を食べに行った。ラーメンを食べ終え、会計を済ませた後のことだった。Uさんは受け取ったお金をレジに入れている店員の肩をたたいて自分の方を向けさせ、笑顔で親指を立て、ラーメンがおいしかったことを伝えていた。

事例10 [121224]

Oさんと2人でお昼にバイキングを食べに行った。店内に入り、テーブルへ向かった。Oさんは車椅子なので、席の椅子を退かしてもらわなければならない。筆者が店員に椅子を退かしてもらうことを伝えようとしていると、Oさんは案内してくれた店員の背中を軽くたたき、椅子を指さして退かしてもらった。

事例9でUさんは、店員の肩をたたいて、注意を自分に向けさせ、おそらく聴者である店員にラーメンがおいしかったことを伝えようと、笑顔を作り、親指を立てて見せた。事例10でOさんは、背中を手で直接軽くたたくことで注意を自分に向けさせ、椅子を指さすことで店員に椅子を退かせることを依頼している。

ろう者同士の会話では、視界に入り、相互注視の獲得が明確になった後に、次の発話を始めていた（坊農、2010）。また、ろう者の家庭では、肩をたたくことや、テーブルや床を軽くたたくことで相手の注意を引く方法はよくとられる（Padden & Humphries, 2003/1988）。

事例9と10からろう者は、肩をたたくことで視線を自分に向けさせて、笑顔を作ることや親指を立ててみせること、それから椅子を指さすといった行動・生活実践によって、聴者との間で意思疎通を成立させている。

次に検討する事例は、カーस्टینگ（Kersting, 1997）の研究にてろう者が語っていた聴者とお互いに理解し合えない乖離を示す相互行為である。

事例11 [130711]

Uさんの買い物に同行した。Uさんが所望するタオルがどこに置いてあるか店員に聞いてほしいとUさんから頼まれた。そこで筆者はタオルの場所を店員に尋ねた。店員は、Uさんに向かって「首に巻いたりする冷たいタオルですよ？」と確認した。筆者がUさんの方に振り返ると、Uさんは筆者の方を見ていた。筆者は店員に「はい」と答えながらUさんに向かって頷いた。筆者が頷いたのを確認してからUさんは店員の方を見て頷いた。筆者がUさんの方に振り返った時、Uさんは筆者を見ていた。

Uさんが店員とのやりとりを事前に筆者に依頼したことは、この事例と同日の事例6にて、Uさんから『話せないから代わりに買ってほしい』と頼まれてギフトカードを購入した際にもあった。

Uさんは、店員がUさんに向かって話しかけてきた内容を把握できないために、筆者が頷いたのを見て店員の言っていることが正しいと判断して、店員に向かって頷いている。一方の店員は、Uさんが所望しているものを筆者経由で間接的に把握しているけれども、

Uさんから直接教えてもらったわけではない。すなわち筆者による翻訳が正しいのか妥当であるのかは両者において不明である。望んだものが手に入ったのか、筆者の翻訳の正しさや妥当さは結果によって判断するしかない。このように、筆者を介して間接的な相互行為にとどまっていた。

ろう者であることを知らない聴者との相互行為

広津（2011）が行ったろう者を対象にしたインタビューで、言語に限らず土台が違うことで、ろう者と聴者の間にズレが存在していることをろう者は語っていた。ろう者に同行するなかで、目の前にいる相手がろう者だと知らない聴者とのぎくしゃくした相互行為に立ち会ったことはすくなくなかった。記録した事例のなかから、2事例を紹介・検討する。

事例12 [130330]

ゴルフ用品店で筆者はUさんにゴルフ用の手袋を買ってもらうことになった。Uさんがレジに手袋を置いた。筆者は会計の様子をUさんの横で見ている。店員がUさんに値段を告げると、Uさんはレジに表示されている金額を確認して、ズボンのポケットから財布を取り出した。店員が「ポイントカードはお持ちですか？」と尋ねた。Uさんは下を向いて財布からお金を取り出していた。Uさんが取り出したお金を渡すと、店員は少し怪訝そうな顔をしていた。Uさんは店員の様子の変化には気づいていないようで、何事もなかったようにお釣りと手袋を受け取って、筆者と店を出た。

事例13 [121224]

Oさんとお昼にバイキングを食べに行った。店に入り、テーブルの手前に車椅子に乗るOさんが、奥のソファに筆者が座った。Oさんの斜め後ろから店員がバイキングのシステムを説明し始めた。筆者は説明を聞いていたが、Oさんは斜め後ろで説明をしている店員に気付かず、筆者に『お腹すいたね』と話しかけてきた。筆者が店員の方を指さすと、Oさんは背後にいた店員を見て“あつ”というような顔をした後、少し申し訳なさそうに笑いながら筆者に『ごめんね』と伝えた。

事例12では、値段を告げた店員の声が聞こえなくても、Uさんはレジの表示を見ることで、支払うべき金額が確認でき、やりとりは滞りなく進んでいた。滞りなくやりとりが進んでいたことで、店員は目の前にいる客に自分の声が届いていない可能性を察知することなく、「ポイントカードはお持ちですか？」と声をかけ続けた。店員がポイントカードについて尋ねたとき、Uさんはお金を取り出すために財布に視線を落としていた。そのため、店員が尋ねていることに、Uさんは気づくことができなかった。もしもこのとき、Uさんが店員の方に顔を向けていたら、聞こえなくても店員がUさんに話かけていることは分かったはずである。そして、声が聞こえないことを店員に伝えて筆談を依頼したり、筆者に通訳を頼んだりといった対応をとることができた。しかし、Uさんの視界に店員が入っていなかったため、店員の問いかけに対応することができなかった。

Uさんの立場からは、問題なく手袋の会計を済ませることができた。一方の店員の立場からは、「ポイントカードはお持ちですか？」という問いかけに応じてもらっていない。

事例13は、店員がOさんの斜め後ろに立って説明を始めたため、店員がOさんの視界から外れてしまい、Oさんから店員の姿は見えなかった。店員が説明をしていることに気づかなかったOさんは筆者に話しかけた。店員が説明していることを筆者がOさんに教えると、店員の存在に気づき、店員の説明を聞いていた筆者に話しかけてしまったことを申し訳なく思ったのか、Oさんは筆者に対して『ごめんね』と謝った。

Oさんの死角で店員が説明をしていたので、Oさんは店員の存在に気づきようがない。Oさんの立場からは、ただ筆者に話しかけていた。店員の立場からは、自分が説明しているにもかかわらず、Oさんが説明を聞かずに筆者に何かサインを送ったように見えたのではないかと考えられる。

事例12と13から聴者が目の前の相手はろう者であることに気づいていない相互行為において、ろう者の視界から聴者が外れることで、それぞれの立場からはすれ違いが生まれていることが分かる。

ただし、聴者の視界からろう者や聴者が外れることでもすれ違いは生まれている。[131123]に、電車の

乗車時に車椅子用の板を置いてもらい、車椅子の乗車を手伝ってもらった際に、Oさんが駅員を見ながら両手を合わせて、頭を軽く下げた。しかし駅員は板を片付けていて、Oさんの方を見ていなかった。改札口の方向に戻っていった駅員を見て、『あの、怒っていた?』とOさんは少し心配そうに苦笑していたことがあった。また、聴者同士が声でやりとりできない場面で、一方の聴者がサインを出すものの、もう一方の視界にサインが入っていないことがある。たとえば、狭い道路での車同士のすれ違い場面がある。すれ違いをするときに、相手の配慮に対して、手を挙げて感謝を示すことがある。その際に、車を動かすことに懸命になっていると、相手からのサインを見逃すことがある。サインを出した方は感謝の気持ちが伝わった気になっているものの、もう一方は何のあいさつもなかったと憤ることになる。聴者においても音や声が聞こえないときには、視界から相手が外れることですれ違いを生むことがある。

ところで、事例12と13にて、両者のすれ違いに気づいた筆者が、ろう者に聴者が話しかけていることを伝えれば、もしくは聴者には相手がろう者であることを伝えれば、すれ違いは回避できた可能性がある。そうしなかったことから、筆者はろう者と聴者の相互行為内のメンバーとして立ち会いつつも、ろう者と聴者における相互行為を対象として外から観察しようとしていた姿勢が読み取れる。

ろう者であることを知っている聴者との相互行為

前項では、ろう者であることに気づいていない聴者との相互行為について事例を検討してきた。本項では、相手がろう者だと知っている聴者との相互行為に立ち会った事例を検討したい。

事例14 [121224]

Oさんのネックウォーマーを一緒に買いに出かけた。Oさんがネックウォーマーを持ってレジに向かう途中、スタッフルームから男性店員が出てきて、Oさんに気づくとこちらに近づいてきた。Oさんがレジにいた女性店員にネックウォーマーを渡し、女性店員がバーコードを読み取っている間、男性店員が白い紙に「いつもありがとうございます」と書

き、Oさんに見せた。Oさんは紙を見て笑顔で頷いていた。そのやりとりを見てOさんがろう者だと気づいた女性店員が「すぐお使いになりますか?」と紙に書いてOさんに見せた。紙を見たOさんはすぐに頷いた。女性店員がネックウォーマーのタグを切り、袋に入れずにOさんに渡すと、Oさんは受け取ったネックウォーマーを車椅子の下の荷物入れにただちに入れてしまった。

この事例の後 [130107] に、Oさんの友人Cさんから届いたメールの文面「[太陽の絵文字] おはようございます C→O [門松の絵文字] 年賀状 住所、教えてください [笑顔の絵文字]」を筆者に見せて、『何て書いてあるか分からない』と書かれてある内容を教えることを求められたことがあった。Oさんは日本語を読むことがほとんどできないことは、「2 研究概要」にてすでに述べていた。

事例14で、Oさんは、女性店員の「すぐお使いになりますか?」という筆談での問いかけに対して頷いたにもかかわらず、ネックウォーマーを受け取ってすぐに荷物入れに入れてしまった。このことからOさんは、女性店員が書いたメモを理解しないまま頷いていたことが推測できる。Oさんはこの店に買い物によく来るそうで、男性店員はOさんがろう者だと知っていたため、筆談でやりとりをした。それを見て女性店員も筆談でやりとりをしようとしたが、Oさんは日本語を読むことがほとんどできないので、このようなすれ違いが起こってしまった。男性店員が書いた「いつもありがとうございます」についても、Oさんは理解して頷いていたのかは分からない。

鈴木・佐々木 (2012) において、ろう者とのやりとりに備えてメモ用紙を用意することをうながしているが、メモがあっても、やりとりがうまくいかないことがある。

ろう者であることに気づいた聴者との相互行為

前項ではろう者だと知っていた聴者との相互行為を検討した。本項では、ろう者と気づかず相互行為が生まれていたのに、ろう者と気づくことで相互行為が生まれなくなった場面に立ち会った事例を検討する。

事例15 [131123]

ショッピングセンター内の眼鏡屋でOさんと筆者はそれぞれ眼鏡を見ていた。Oさんの方を見ると、女性の店員がOさんに眼鏡の説明をしていて、Oさんは頷いていた。しばらくしてもう一度Oさんの方を見ると、今度は男性の店員が眼鏡を一つひとつ口話で説明しながらOさんに手渡していた。Oさんは頷きながらその眼鏡を受け取って、1つずつ試着して、鏡を見ていた。筆者はその男性の店員の言っていることをOさんに伝えた方がいいだろうと思い、Oさんに近づくと、Oさんに『この眼鏡どう?』と聞かれた。筆者は『いいですね』と答えた。店員は筆者がOさんに近づいていった時、Oさんに試着をしてもらう次の眼鏡を選んでいたので、少しこちらを見て、その後Oさんに眼鏡を持って来なかった。Oさんとしばらく話をした後、再度Oさんと筆者は分かれて眼鏡を見ていたが、その後店員はOさんに話しかけなかった。

Oさんは店員の説明が聞こえていない。けれども、店員の説明に対してOさんは頷いていて、周りから見ると相槌を打っているように見えた。店員からもそう見えたようで、熱心に説明を続けていた。しかし、筆者がOさんと話した後、男性の店員はOさんに眼鏡を持って来なくなった。店員は、筆者とOさんが手話で話しているのを見てOさんがろう者であることが分かり、眼鏡を持っていくのを止めたように思えた。筆者はOさんに店員の説明の内容を手話で伝えた方がいいと思い近づいたのだが、Oさんが筆者に手話で話しかけたことで、Oさんがろう者であることに店員は気づいた。その後、店員はOさんに説明するのを諦めてしまったようであった。

広津（2011）にて、ろう者は聴者が歩み寄ろうとすることを好意的に受け止めていた。車椅子で眼鏡を手に取りづらいOさんにとって、店員の説明が分からなくても、眼鏡を手渡してくれるだけでも、店員が話しかけてくるメリットはあった。けれども、Oさんに筆者が手話で話しかけたことによって、聴者である店員は話しかけている相手がろう者だと分かり、話しかけるのを諦めてしまったようであった。

4 考察

ろう者の日常場面に同行し、聴者がろう者の具体的な行動・生活実践に立ち会うことを通して、ろう者の行動様式・生活様式であるろう文化を探ってきた。併せて、聴者の行動様式・生活様式である聴文化を探ることも本研究の目的であった。

4.1 ろう文化と聴文化

結果では、ろう者の行動・生活実践に筆者が立ち会うこと、ろう者同士の行動・生活実践に筆者が立ち会うこと、そしてろう者と聴者の行動・生活実践に筆者が立ち会うことに分けて事例検討を行い、ろう文化と聴文化を探ってきた。本研究で明らかになったろう文化と聴文化は、以下の2点である。

知覚する対象、対象から読み取る意味

ろう者が順番待ちの紙に聴者である筆者の名字を書いたこと（事例5）や、電話番号を記入する際に末尾に（FAX）と書き加えたこと（事例6）があった。事例5と6において、筆者とは異なる対象を知覚していることや対象から異なる意味を読み取ることの構図を図4に表した。そのような行動・生活実践の背景には、ろう者と聴者における聞こえることの知覚の違い（事例1, 2）があり、ろう者は聴者による将来の対応を先取りしていること（事例4）が考えられた。

加えて、ろう者同士がバックミラーを介して手話で会話をしていること（事例8）があった。このようなバックミラーの使用は、ろう者が手話を言語とすることに関連して、手話は相手の視界のなかで展開しなければならないこと（事例3, 7）から、ろう者特有の行動様式・生活様式といえるだろう。事例8において、異なる対象を知覚していることや対象から異なる意味を読み取ることの構図を図5に表した。

これらの行動・生活実践が興味深いのは、ろう者と聴者が後述する「環境内の参加者」(Ittelson, 1973)として、同じように環境に取り囲まれるなかで、ある対象をろう者が聴者にはない方法で使用していたことで